

原 著

保育士の保育所看護職者への認識と期待する役割

片岡亜沙美^{1*}, 矢野 智恵², 山崎美恵子³

要約：本研究は、保育士の保育所看護職者への認識と期待する役割を明らかにするため、看護職者が配置されている保育所に勤務している保育士6名、看護職者が配置されていない保育所に勤務している保育士6名の計12名を対象に半構成的面接法を用いて質的帰納法的研究を行った。その結果、【子どもの日常的な健康管理】【健康問題への判断・対応】【専門性を活かした相談役】【専門性を活かした教育的関わり】【子どもの安心感】【専門性を活かした保護者支援】の6カテゴリーが抽出された。看護職者の有無に関わらず、保育士は病気の早期発見・異常の判断、急変時への対応など専門的知識、根拠に基づいた専門的対応を期待し、看護職者の存在そのものが保育士・保護者への安心感につながっていた。家族の養育力の低下が指摘されている現在、保育所にはさらなる子どもの健康支援、保護者支援が求められており、保育保健においては看護職者の存在が保育士への教育的役割を果たすとともにお互いの専門性を発揮することが保育の質の向上につながることを示唆された。

キーワード：保育士，保育所看護職者，役割，認識

I. はじめに

今日、保育所における保健活動は重要な意味もっている。単に子どもの疾病・傷害に対する対応だけでなく、生活リズムが整っていない等子どもの生活の変化から生じる健康上の問題、さらに不安や悩みを抱える保護者の増加、養育力の低下、児童虐待の増加など子育て上の問題が多くみられるようになった。このような社会的背景を踏まえ、平成20年3月保育所保育指針が告示され、平成21年4月に実施となった。また改定の主な内容として、「保育の内容、養護と教育の充実」、「健康・安全及び食育の重要性」、「保護者に対する支援」が明記され、保育所における乳幼児の健康支援と

保護者支援の重要性を反映している¹⁾。このように保育所の役割は深化・拡大しており、保育士も子どもの健康問題でさまざまなことに困難を感じながら保育を行っている²⁾³⁾。木村らによる保育所看護職者の役割に関する実態調査⁴⁾において、子どもと家族に対する健康教育・保健指導、救急時の対応や様々な健康問題を抱える子どもたちの個性に対応できる専門性、異常の早期発見・早期治療への連携が明らかになっている。しかし、保育士が保育所看護職者に期待する役割について研究はされていない。また、看護職者の配置へのニーズはあるものの現在保育所における看護職者の配置は2割とまだ少ないのが現状⁵⁾である。そこで

^{1*}高知学園短期大学 専攻科地域看護学専攻 Email: akataoka@kochi-gc.ac.jp

²高知学園短期大学 看護学科 Email: cyano@kochi-gc.ac.jp

³高知学園短期大学 専攻科地域看護学専攻 Email: myamasaki@kochi-gc.ac.jp

保育士はどのようなことに困難を感じているのか、保育所看護職者の必要性への認識を通して、保育所看護職者に期待している役割を明らかにするため、本研究を行った。

II. 研究目的

1. 看護職者がいないことでの保育上の困難さを明らかにする
2. 保育所における看護職者の配置の有無による看護職者の必要性の認識、看護職者がいることのメリット、デメリットについて明らかにする
3. 保育士が看護職者に期待する役割を明らかにする

III. 用語の定義

1. 保育所看護職者：保育所に配置されている看護師もしくは保健師
2. 認識：過去の経験あるいは現状から保育士が保育所看護職者の配置の有無や活動を通し看護職者に対する捉え方や考え方
3. 役割：保育士が保育を行う上で保育所看護職者に成果を期待している行動や役目

IV. 研究方法

1. 研究デザイン：質的帰納法的研究
2. 研究対象：経験年数5年以上で看護職者が配置されている保育所に勤務している保育士6名、看護職者が配置されていない保育所に勤務している保育士6名の計12名(園長は含まず)。
3. データ収集方法：研究の枠組みに基づき半構成インタビューガイドによる面接調査を1人につき60分程度で実施した。面接内容は承諾を得た上でICレコーダーに録音した。なお、調査期間は平成21年4月～5月である。
4. 分析方法：看護職者が配置されていない保育士のデータから保育を行う上で困難に思っている内容、看護職者が配置されている保育士のデータから看護職者がいてよかったと感じ

る内容と看護職者が配置されていない保育士のデータから看護職者がいてくれた方がいいと思う内容に注目した。また、看護職者の配置の有無に関係なく看護職者に期待する内容に注目し、得られたデータをKJ法を用いてカテゴリー化を行った。

5. 倫理的配慮

A市保育課・各施設長に本研究の主旨・目的を説明し承諾を得た。対象者への研究の目的と方法、研究への参加・中断は自由意志であること、それによって不利益は生じないこと、データは厳重に管理し研究終了後は破棄すること、匿名性を守ることを口頭で説明し同意を得た。面接場所は可能な限り声の漏れない場所とし、承諾を得た上でICレコーダーで録音した。研究成果は参加者個人が特定されない形で公表することを説明し承認を得た。なお、高知学園短期大学研究倫理審査会において承認されている(承認番号2号(H21.3.5))。

V. 結果

1. 調査対象者の概要

看護職者が配置されている保育所の保育士6名、看護職者が配置されていない保育所の保育士6名の合計12名であった。経験年数は10年未満が3名、10年以上が2名、20年以上が2名、30年以上が5名であった(表1)。

表1. 対象者の概要

	経験年数	看護職者配置	保育所
A	10年以上	無	公立
B	10年以上	無	私立
C	20年以上	有	私立
D	10年未満	無	私立
E	10年未満	無	私立
F	10年未満	無	私立
G	30年以上	有	公立
H	30年以上	有	公立
I	30年以上	有	公立
J	30年以上	有	公立
K	30年以上	有	公立
L	20年以上	無	私立

2. 保育士が考える看護職者がいないことでの保育上の困難さ

看護職者がいないことでの保育上の困難さでは【健康問題の判断・対応への困難さ】【子どもの健康状態の不確かさの中での保育】【病児と他児との同時保育】の3カテゴリーが抽出された(表2)。

以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを《》、ローデータを「」で示す。

表2. 看護職者がいないことでの保育上の困難さ

カテゴリー	サブカテゴリー
健康問題の判断・対応への困難さ	怪我や病気の判断に困る
	病院受診の判断に迷う
	健康問題への専門的アドバイスがほしい
	伝染病かどうかわからない
病児への対応に自信がない	
子どもの健康状態の不確かさの中での保育	子どもの状態がわからず不安になる
病児と他児との同時保育	病児と他児を同時にみなければならず困難である

1) 健康問題の判断・対応への困難さ

【健康問題の判断・対応への困難さ】とは、健康への専門的知識がないことで疾病の判断や対応に自信がもてないことである。

保育士は「(病気の)専門的知識がないので感染する病気かどうか分からない」のように《伝染病かどうかわからない》思いや「怪我した時とか、頭打った時。たんこぶができて痛がったりしてたら大丈夫かなと思うので。そういう時に常時看護師の方がいたら」と《病院受診の判断に迷う》と想っていた。また、「(子どもが)ひきつけをおこした時の対応方法を勉強していても実際おきると焦ってしまう」と《病児への対応に自信がない》と思いつつ保育を行っていた。そのため、「感染症が流行っている時にこれはこうだよ、(親に)連絡してあげたらいいよって言ってもらえたらうれしい」と《健康問題への専門的なアドバイスがほしい》と思っていた。

2) 子どもの健康状態の不確かさの中での保育

【子どもの健康状態の不確かさの中での保育】とは、目の前でおきている子どもの状況が分からず不安を感じながら保育することである。

保育士は「(喘息の子どもが)ヒューヒューいってて。一時吸入したり病院に通われたりしたので。もう音がしだすともう…初めてだったのもう怖くてね。こんな音がしてるって驚きました。」や「大きい怪我や頭を打った時その後も家で何か起きていないか、次の日まで大丈夫かと不安に思います」と語っており、《子どもの状態がわからず不安になる》中、保育を行っていた。

3) 病児と他児との同時保育

【病児と他児との同時保育】とは、病児にも気を配りながら健康な子どもの保育を一緒に行うことである。「熱がでて迎えにくるまでの時間があるのでひきつけの子どもがいると目が離せない。けど担任なのでその子ばかりみていけない」と《病児と他児を同時にみなければならず困難である》と感じていた。

3. 保育所における看護職配置の有無による認識

1) 看護職者がいる保育所の保育士が考える看護職者の必要性

保育所における看護職者の必要性では【子どもの成長発達のためには両者の専門性を活かした視点が必要】【保育士・保護者の安心感】【異常の早期発見・対応】【安全な保育環境の向上】【応急的な病児の看護】の5カテゴリーが抽出された(表3)。

(1) 子どもの成長発達のためには両者の専門性を活かした視点が必要

【子どもの成長発達のためには両者の専門性を活かした視点が必要】とは、保育を行う上で、子どもの成長発達のためには保育士と看護職者の両者の専門性を活かした関わりが必要であるということである。

保育士は「私たちは保育士なので怪我とか病気

表3. 看護職者がいる保育所の保育士が考える看護職者の必要性

カテゴリー	サブカテゴリー
子どもの成長発達のためには両者の専門性を活かした視点が必要	保育士と看護職の着眼点は違う
	両者の専門性を活かした視点が必要
保育士・保護者の安心感	保育士に安心感がある
	看護職がいることで保護者が安心している傾向がある
異常の早期発見・対応	体調の変化への気づきと対処が早い
安全な保育環境の向上	保育環境を整える上で看護師の安全への視点がよい
応急的な病児の看護	与薬の管理
	病児を預かる場所・人の確保

に対して経験があってみてもやっぱり看護師さんとは違う。違う見方がある。(中略)判断がちゃんとしてます。私達の見方よりも医学的にみれるんじゃないかな。病気にしても怪我にしてもこれはきっとこれだろうという判断が看護師さんの中であるので。私達が感じてる感覚よりも。(保育士が)こうじゃないかなって思っても『これ以上こうなったらいかんよ』とか『水分補給をして』とかそういう手立てをきちんと教えてくれる。」と語っており、専門的知識に基づいた観察やアセスメントをした上で予防するといった健康支援を行っており《保育士と看護職の着眼点は違う》と感じていた。そして「私たちの力と看護師の力が合わさって、この保育が成り立っているのではないかと思います。いろんな家庭背景の園児がいてその子がどうしてこんな状態なのか、おうちの人がどうしてこんなやろうかねっていう話をした時、(看護職は)生い立ちはどうだったのかなとか、いろんなことが出てくるわけですよ。人格を形成していく上で看護師さん、そんなお話もなさいますよね。そしたらそのお母さんについてはどんなふうに関わっていいたらいいか話をしたりします。でもまずは受け入れようとか、それからだんだん返していこうとか。」と保護者支援を行う上でも《両者の専門性を活かした視点が必要》だと感じ

ていた。

(2) 保育士・保護者の安心感

【保育士・保護者の安心感】とは、看護職者の存在と専門的な対応で子どもの健康を守ってくれているという安心感である。

保育士は「看護師さん、朝園中を回ってくれます。『どうですか?』って聞いてくれて。その時に心配な事とか色々気になる事をその時に相談できて」と看護職が巡回し、気にかけてくれることで《保育士に安心感がある》だけでなく、「保護者も安心感もあると思います。園内で病気が出た時、看護師さんから手紙がでるので、流行ってる病気のことやこういう事に気をつけてくださいって事細かに書いた手紙を出してくれています。病気が流行っているのだから保護者も判断がすぐつきますしね。私達がいうのと看護師さんがいて伝える事とは、またちょっと違うと思う。」と語っており、お便りを通して《看護師がいることで保護者が安心している傾向がある》ことを感じていた。

(3) 異常の早期発見・対応

【異常の早期発見・対応】では「病気の可能性もあるから診てもらったほうがえいよって教えてくれる。0歳児は特に分からない発疹とかでますよね。ここに朝無かった発疹があるからお母さんに伝えてください」と《体調の変化への気づきと対処が早い》ことを感じていた。

(4) 安全な保育環境の向上

【安全な保育環境の向上】とは、看護職の視点を活かし安全に保育環境を整えることができることである。保育士は「0歳児とか1歳児の保育になったら、一番安全に保育することが大事ですから、そこはやっぱり看護師さんの着眼点はすばらしいと思います。(子どもは)まだまだ生活経験も少ないし、生まれて何ヶ月、一年の生活の中ではまだ学習してないので。それ(危険なもの)はさっと除けてくれたり、さっと察知して危険なものは

のけてくれたりします。そこらへんはすごいなと思いますね。」と保育士は《保育環境を整える上での看護師の安全への視点がよい》ことで安全な保育環境が整えられると感じていた。

(5) 応急的な病児の看護

【応急的な病児の看護】とは、医療的な処置や発熱などを含む応急的な病児の看護である。保育士は「うちの保育園では与薬は看護師さんにやってもらってます。そもそも医療行為なので。」と語っており《与薬の管理》や「熱がでた時の子どもが休める場所とかみてくれる人がいて助かる」と《病児を預かる場所・人の確保》を求めている。

2) 保育所に看護職者がいない保育士が考える看護職者の必要性

一方、保育所に看護職者がいない保育士が考える看護職者の必要性では【保育所全体の安心】【看護職者のイメージ不足のため不明】の2カテゴリーが抽出された(表4)。

表4. 看護職者がいない保育所の保育士が考える看護職者の必要性

カテゴリー	サブカテゴリー
保育所全体の安心	看護師の説明で保護者は納得・安心できる
	安心して保育できる
	保育の中では何があるかわからない
	子どもの安心感
看護職者のイメージ不足	看護職者の職務がわからない
	いたらいたでよい

(1) 保育所全体の安心

【保育所全体の安心】とは、健康上何が起こるかわからない保育中でも看護職者の存在により、保育士・子ども・保護者に安心感がもてることである。保育士は「はっきり知識というか私も専門家ではないので、看護師さんが言ってくれるみたいに(保護者に)専門的にはいえないし。」と語っており、「看護師さんがおったら(園医から)専門的なこともいわれても専門的なことを交えてお母さんにわかるようにいえるんだろうなって思った

こともありました。」と語っており、《看護師の説明で保護者は納得・安心できる》と思っていた。また、「(1歳児を受け持って)3月生まれっていったらまだ不安で。赤ちゃんみたいな子がくる。」と乳児期の特徴である急変のリスクがある《保育の中では何があるかわからない》という不安を抱いていた。そして「このぐらいなら大丈夫ってしてくれる人がいたらその後も安心できる。」と専門職からの助言があれば《安心して保育ができる》と考えていた。また、《子どもの安心感》として「学校では保健室に子どもが駆け込んだりするように、私達とは違うちょっと先生みたいな感覚が子ども達にもあるんじゃないかな。看護師さんが園にいれば子ども達にとって嬉しいことだと思う」と語っていた。

(2) 看護職者のイメージ不足

【看護職者の職務イメージ不足】では、看護職者が配置されていないことで「看護師さんがいることがないので、看護師さんがどういうことをしてくださるかイメージできない」と《看護職者の職務がわからない》ことで必要性がわからないと思っていた。

3) 保育士が考える看護職者がいることのメリットとデメリット

看護職者がいることのメリットとして【園児への健康支援の充実】【環境整備の向上】【保育士の判断への保証】【子どもの健康に関する相談】【保育に専念できる安心感】【保護者への専門的関わり】の6カテゴリーが抽出された。デメリットとして【保護者の依存心の高まり】が抽出された(表5)。

(1) 園児への健康支援の充実

【園児への健康支援の充実】とは、専門的なアセスメント能力を活かして子どもの病気の早期発見・早期対処を行うことでより質の高い子どもの健康管理を行うことである。

保育士は「0歳児の発疹をみて朝なかったもの

表5. 保育士が考える看護職者がいることの
メリットとデメリット

カテゴリー	サブカテゴリー
園児への健康支援の充実	専門的視点の観察から病気の早期発見をしてもらえる
	保護者への連絡・受診の必要性の判断をしてもらえる
	健康と異常の判断をしてもらえる
	適切な処置をしてもらえる
	急変時に冷静で的確な指示を与えてもらえる
	子どもの健康観察をしてくれる
環境整備の向上	衛生的な環境を整えてくれる
保育士の判断への保証	保育士の判断に対する保証をしてくれる
子どもの健康に関する相談	子どもの症状に関する相談ができる
	専門的な視点から子どもの健康状態を知ることができる
保育に専念できる安心感	看護職者の存在そのものへの安心感がある
	専門的な観察をしてもらえるという安心感がある
	子どもの健康に関することを任せられる安心感がある
	病気の子どもを保育することの怖さに対する安心感がある
保護者への専門的関わり	保護者に専門的な説明・助言をわかりやすくしてもらえる
	子どもの健康問題に関する助言に説得力がある
保護者の依存心の高まり	子どもの病気時に保護者のお迎えが来なくなる恐れ

があるからお母さんに伝えてほしいと言ってくれた。」と《専門的な視点の観察から病気の早期発見をしてもらえる》ことや《保護者への連絡・受診の必要性の判断をしてもらえる》ことをメリットと感じていた。また、「判断がきわどい時に（看護師に）みてもらったら安心できる。判断がきちんとしてるので医学的にみれている。」と《健康と異常の判断をしてもらえる》ことを感じていた。

また、「痙攣がおきた時に冷静に判断して(保育士に)指示をしてくれ対応ができた」と《急変時に冷静で的確な指示を与えてくれる》ことで、子どもの健康問題の早期発見・早期対処につながっていた。また「朝必ずどのクラスにも回ってくれる」ことや「1歳未満児のクラスに入りながら健康状態をみながらおむつ替える時とかミルクあげる時、手伝ってもらったり」と毎日《子どもの健康観察をしてくれる》ことで【園児への健康支援の充実】につながっていると感じていた。

(2) 環境整備の向上

【環境整備の向上】では、感染予防のため専門的な視点をもって保育環境を衛生的に整えることである。「インフルエンザが流行った時に消毒液をおくとか指導もしてくれます」と語っており、感染予防のため《衛生的な環境を整えてくれる》と感じていた。

(3) 保育士の判断への保証

【保育士の判断への保証】とは、子どもの健康問題を判断した際、その判断が正しいかどうか確認できることである。「看護師さんのプロからみた判断と自分の考えが同じだと安心できる」と《保育士の判断に対する保証をしてくれる》ことをメリットと感じていた。

(4) 子どもの健康に関する相談

【子どもの健康に関する相談】とは、子どもの健康問題で気になることを専門的な視点から説明をしてくれるため相談することである。

保育士は「子どもの成長を一緒に見ていく上では、それぞれの子どもをああやね、こうやねって(看護師と)話して。最近あの子歩く時腰に力がはいらないみたいだけど、なんだろうね」と心配な《子どもの症状に関する相談》をしていた。また、「目の病気で目やにがたくさんでいる子どもさんがいて。『目じゃないところにいっぱい出るのはやっぱり鼻と眼がつながっているからよね』と教えてくれた。中略（目やにがでているのをみ

て)やっぱり病院へ行ったほうが良いと思うからお母さんに言ってねって。専門職の考えで私達に言ってくれる」と相談することで《専門的な視点から子どもの健康状態を知ることができる》と感じていた。

(5) 保育に専念できる安心感

【保育に専念できる安心感】とは、保育を行う中で看護職者がいること、何かあれば対応してくれるという安心感の中で専念して保育ができることである。

保育士は「てんかんのお子さんがおって本当に怖いけど、今なら(看護師が)すぐに来て対応してくれるから安心」と《病気の子どもを保育することの怖さに対する安心感》を持っており「怪我の深さとか場所によって怪我の程度がすごく違って見える時がありますよね。頭の怪我だったら血がたくさんでるし。そんなに血がでてなくても、後に残りそうなものもあつたりするので。判断に迷う時、診てもらった方が安心できる」と《専門的な観察をしてもらえるという安心感》や《子どもの健康に関することを任せられる安心感》を抱いていて保育を行っていた。また、「看護師さんがいると精神的に違う。安心感が全然違う。」と《看護職者の存在そのものへの安心感》を抱いていた。

(6) 保護者への専門的関わり

【保護者への専門的関わり】とは、専門的な知識を活かし保護者に分かりやすいように伝えることで子どもの健康について理解してもらうことである。保育士は「専門的なことも交えてお母さんに分かりやすく説明をしてくれる」と語っており《保護者に専門的な説明・助言をわかりやすくしてもらえる》と感じていた。また、「保育士が経験が長いからといって色々言ってもだめで。健康面に関して保護者にアドバイスする面は看護師さんに言ってもらった方が親の受け取り方も全然違う。『そっか』っていうことも結構ある。」のように《子どもの健康問題に関する助言に説得力がある》と感じており看護職者の【保護者への専門的

関わり】を必要としていた。

(7) 保護者の依存心の高まり

保育士が考える看護職者がいることのデメリットとしては【保護者の依存心の高まり】が抽出された。保育士は「保護者の中に(子どもに)熱が出ても看護師さんがみてくれるから構わないと思われ方も出てくるのではないかなという不安もある」と語っており、看護職者がいることで《子どもの病気の時に保護者のお迎えが来なくなる恐れ》を抱いていた。

4. 保育士が考える保育所看護職者に期待する役割

保育士が考える保育所看護職者に期待する役割は【子どもの日常的な健康管理】【健康問題への判断・対応】【専門性を生かした相談役】【専門性を生かした教育的関わり】【子どもの安心感】【専門性を生かした保護者支援】の6カテゴリーが抽出された(表6)。

1) 子どもの日常的な健康管理

【子どもの日常的な健康管理】とは、健康状態の観察や衛生的な保育環境を整え、子どもが健康で安全な生活を送れるようにすることである。保育士は「看護師さん毎朝クラスを回ってくれます」や「インフルエンザが流行った時には消毒液を置いたり、子ども達にも指導もしてくれる」と《健康管理を担ってほしい》と期待していた。

2) 健康問題への判断・対応

【健康問題への判断・対応】とは、目の前で子どもにおきている、また、起こっているかもしれない健康問題を判断し、対応することである。「怪我の深さとか場所によって怪我の程度がすごく違って見える時がありますよね。頭の怪我だったら血がたくさんでるし。そんなに血がでてなくても、後に残ったりしそうなものもあつたりするので。判断に迷うとき、診てもらった方が安心でき

表6. 保育士が看護職者に期待する役割

カテゴリー	サブカテゴリー
子どもの日常的な健康管理	健康管理を担ってほしい
健康問題への判断・対応	怪我への判断と通院への判断をしてほしい
	子どもの健康状態への判断をしてほしい
	病児の対応をしてほしい
	感染症流行時への対応をしてほしい
専門性を活かした相談役	子どもの健康問題への保育士の相談役になってほしい
	子どもの健康問題への保護者の相談役になってほしい
専門性を活かした教育的関わり	子ども達に身体のことを教えてほしい
	病気のことを保育士に教えてほしい
	健康に関する専門的な話を保護者にしてもらいたい
子どもの安心感	子ども達に安心感を与える養護教諭的役割を担ってほしい
専門性を活かした保護者支援	園医からの説明を保護者に分かりやすく伝えてほしい
	看護の専門的立場から家庭支援をしてほしい
	子どもの状態について専門的に保護者へ説明をしてほしい

る」と《怪我への判断と通院への判断をしてほしい》と想っていた。また、「目の病気で目やにがたくさんでいる子どもさんがいて。『目じゃないところからいっぱい出るのはやっぱり鼻と眼がつながっているからよね』と言って。中略（目やにがでているのをみて）やっぱり病院へ行ったほうがいいと思うからお母さんに言ってねって。専門職の考えで私達に言ってくれる」と子どもにおきている状態を根拠に基づいた説明や助言から《子どもの健康状態への判断をしてほしい》と感じていた。

3) 専門性を活かした相談役

【専門性を活かした相談役】とは、保育士が子ど

もの健康・発達面で気になっていること、保護者が不安に思っていることを専門性を活かした相談や助言をもとめることである。

保育士は「気になる子どもとか出てきますよね。判断的には難しい、私達としても分からない自閉症とかADHDも一緒に勉強してもらって診断されていない子ども、疑いのある子どもと一緒に見て考えて、看護師さんの目もいれて見ていけたらと思います。」と語っており、《子どもの健康問題への保育士の相談役になってほしい》と想っていた。また、「(保護者から)病気のこととかそういうようなことを聞かれた時に私達も勉強はある程度してますが、看護師さんから言われるほうが親としては信頼性もてるんじゃないでしょうかね。」と《子どもの健康問題への保護者の相談役になってほしい》と想っていた。

4) 専門性を活かした教育的関わり

【専門性を活かした教育的関わり】とは、専門的知識をもとに保育士、子ども、保護者に対し健康支援に教育的に関わってほしいということである。

保育士は「病気の知識を保育士に教えてほしい」、「病院へ行ったほうがいいのか、行かないほうがいいのかという判断も(看護師に)任せてるんですが。やっぱりきちんと話をして(看護師に)教えてもらわないといけないなと思っています。」と看護師任せではいけないという思いもっており、疾病の知識やそれに基づく健康問題の判断の仕方や対応方法など保育士に《病気のことを教えてほしい》と想っていた。また、「歯とか専門的なことを子ども達にも教えていただけたら。私達も研修とか受けて勉強してしまいますけど、やっぱり私達が言うのと専門的な方からのお話は子ども達も受け取り方が違うんじゃないかなと思います」と語っており、《子ども達に身体のことを教えてほしい》と想っていた。また、「予防的などころでも(保護者と)関わりたいんですが。例えば、偏食の子にしても続いていくと将来どんなになるのか、健康面でどんな弊害がでてくるのか。関係

ができてきたら言ってくれます。」とヘルスプロモーションの視点をもった《健康に関する専門的な話を保護者にしてもらいたい》と思っていた。

5) 子どもの安心感

【子どもの安心感】では、「学校では保健室に子どもが駆け込んだりするように、私達とは違うちょっと先生みたいな感覚が子ども達にもあって、看護師さんが園にいることは子ども達にとって嬉しいことだと思う」と語っており、子ども達に安心感を与える養護教諭的役割を担うことを期待していた。

6) 専門性を活かした保護者支援

【専門性を活かした保護者支援】とは、専門的知識を活かして個別な関わりが必要な保護者への支援である。

保育士は「園医さんから言われたことを専門的なことを交えてお母さんに言えるんじゃないかと思う」と語っており子どもの健康情報を伝えるために《園医からの説明を保護者にわかりやすく伝えてほしい》と思っていた。また、「虐待や、難しい家庭が年々増えてきているから。そういう方々に専門の立場からお話していただくと有難い」と語っており《看護の専門的立場から家庭支援をしてほしい》と思っていた。また、「気になる子どもの親御さんに発達で気になるところがあるのでちょっと行ってみてくださいとかいうのもなかなか難しいので。看護師さん保健師さんとか専門職が伝えるのと保育士が伝えるのは違うかなと。どういう風に親御さんは感じるのか分かりませんが看護師も一緒に見てる中で気になる面があるので、専門機関に行ってみましょうかとか、そういう風に一緒にアドバイスできたらいいかなとは思ったりもします。」と語っており、《子どもの状態について専門的に保護者へ説明してほしい》と期待しており、保育士とともに専門的立場から支援の必要な保護者への関わりを一緒に行うことを期待していた。

VI. 考察

1. 看護職者の配置による保育士に与える影響

看護職者が配置されている保育所の保育士と配置されていない保育所の保育士ともに保育所における看護職者の必要性として【保育士・保護者の安心感】を感じていた。そして看護職者が配置されている保育士、看護職者が配置されていない保育士はともに病気の早期発見・異常の判断、急変時への対応など病気への対応や専門的な視点で保護者に説明をしてくれることを期待していた。

看護職者がいない保育士は、「(病気の)専門的知識がないので感染する病気かどうか分からない」という語りからも【健康問題の判断・対応への困難さ】を抱きながら、【子どもの健康状態の不確かさの中での保育】を行っており、常に緊張した中で保育を行っていることが考えられた。保育士は日々の保育の中で、子どもの疾病や急変時への対応は経験に基づいたものであり、専門的知識に基づいているわけではないという思いをもちながら、不安の中で保育を実践していることが明らかとなった。その中で子どもの健康に関する相談や助言、保育士の判断への保証をしてもらえることは看護職者の専門性を発揮した保健活動が保育士の安心につながり、保育士の専門性を発揮できると考えられる。また、看護師がいてくれるという安心感があり保育士は日常の保育の中に看護職者がいるという安心感の中で保育に専念できることも明らかになった。

子ども・保護者は保健指導や病気の説明になると保育士よりも看護職者の説明や助言をよく聞くと報告されている⁶⁾。本研究においても、保育士は看護職者が保護者に専門的な説明・助言をわかりやすくしてくれる、子どもの健康問題に関する助言に説得力があることを認識しており、保育士は【専門性を活かした保護者支援】を看護職者に期待していた。保育所保育指針が改定した目的は保護者支援の必要性、子育て支援の重要性がある。子どもの健康問題に関して保育所看護職者の専門的知識、根拠に基づいた助言や行動が保護者支援に非常に重要であると考えられる。

2. 保育士が認識している専門性を活かした役割

保育士は保育所看護職者と協働する中で、《保育士と看護師の着眼点がちがう》ことを認識していた。着眼点とは、安全管理の視点や、子どもの健康状態を観察する際に専門的知識に基づいた観察やアセスメントの視点である。佐藤⁶⁾は看護職者には問題解決過程の思考に基づいて看護過程が備わっており、その実践が保育所における看護の専門性であると述べているように、本研究でも看護の専門性が発揮されていた。保育士は自分達とは違った見方を知り看護職者と協働する中で、子どもや家族を様々な視点でみることに繋がっていると実感しており、子どもや家族を保育していく上で【両者の専門性を活かした視点が必要】だと考えていた。中野⁷⁾は異なる専門性をもつ専門職者が、“子どもの最善の利益”という共通の目標に向かって、限られた期間内に、直面している子どもの健康に関わる問題の解決に向けて活動を展開することが重要であると述べており、保育所における保健活動においても保育士と看護職者の両者の視点で子どもの保育を行っていくことが重要である。このように子どもや家族に必要な保健活動を看護職者と保育士で協働していくことがこれからの保健活動で保育の質の向上につながると考える。また、保育所保育指針改定では保育士の専門性を高めることの重要性もいわれている⁸⁾。保育士に求められる能力には、専門的な知識・技術を習得するだけでなく、それに裏付けられた判断能力も強く求められている。本研究では、保育士は病気・救急時への対応など目の前で起きている健康問題に対する専門的対応をすることを期待しており、保育士は看護職者に健康管理を任せている傾向があった。乳幼児期は生涯にわたり健康的な生活を送るための基礎を培う時期であり、保育士の日々の関わりが子どもの健康支援に重要となってくる。保育士は、健康な生活習慣への確立、予防的な関わりなど将来を見据えたヘルスプロモーションに視点をおき支援していくことが必要ではないかと考える。

しかし、【看護職者の職務イメージ不足】が今

回明らかになった。これは保育士が保育所に看護職者がいないため、保育士が看護職者の役割について理解できないということが考えられた。従前の保育所に看護職者がいないで保育所経営がされていた時代がずっと続いていた保育所文化のなごりが現在にも現れていると考える。保育所保育指針改定によって保育所内に看護職者を配置することによって保育所看護職者の専門性を発揮した実践により、健康教育など今求められている子どもの健康維持・増進への視点を養えるのではないだろうか。佐藤⁶⁾によると、保育所に看護職者が配置されたことで保育士が子どもの健康状態の観察や疾病の対応が専門的におこなえるようになったこと、職員全体の保健に対する知識・技術が向上したと報告がある。このように看護職者の配置により、専門性を発揮することで教育的役割を担い、保育士の専門性の向上へとつながると考える。また、保育士の研修制度や研修内容を充実させるとともに、保育士養成課程における教育内容を精選すること、問題解決型思考を取り入れた幅広い教育が必要だと考える。

3. 今後、保育所看護職者に求められる能力

全国の幼稚園、保育所の障害児数はこの20年間で約3倍、10年間で約2倍もの増加になっている⁹⁾。さらに1970年代から全国的に障害児の早期発見・対応がはじまり、幼稚園・保育所で対応する障害児の障害の重度化、多様化、低年齢化が進んでおり、保育・療養の対象は重症児からいわゆる「気になる子」まで幅が広がっている現状がある⁹⁾。本研究で保育所看護職者に期待している役割として保育士に病気のことを教えてほしいという思い、子どもの健康問題に一緒に関わってほしい、専門的な立場から家庭支援をしてほしいと個別的な関わりを含む【専門性を活かした相談役】や【専門性を活かした保護者支援】を期待しており、保育所看護職者は健康問題への対応のため発達障害や虐待など幅広い知識の習得、また、対応する能力が求められている。また、乳幼児のアセスメント能力の他に、園全体の健康管理能力の向

上、地域や他機関を結ぶ連携が求められており、保育所看護職者の専門性を高めていくことも今後必要である。

VII. 結論

- ・保育所において看護職者が専門職としての健康管理能力を発揮することにより保育士は安心して保育に専念でき、質の高い保育につながる可能性が示唆された。
- ・保護者の育児不安、養育力の低下が指摘されている今日において、看護職者が保育士とともに互いの専門性を発揮しながら保護者に対する育児支援を行っていくことが期待される。

研究の限界と今後の課題

本研究は特定の地域における調査であるため、一般化には限界がある。今後、得られた結果をもとに信頼性・妥当性が得られるようさらなる研究を進めていく必要があると考える。

本稿の一部は第40回日本看護学会—小児看護—(平成21年9月26日高知市)において発表した。

謝辞

本研究を進めるにあたりお忙しい中、面接に快くご協力くださいました保育士の皆様、研究の理解とご協力いただきました施設長及びA市役所保育課の皆様に心よりお礼申し上げます。

引用文献 (References)

- 1) 高野陽, 小児保健における保育所保健, *小児保健研究*, **2004**, 63(4), 52-54
- 2) 金泉志保美, 保育所における子どもの健康管理上の問題と看護職の役割, *小児看護学会抄録*, **2008**, 18, 155
- 3) 多田敦子, 川口千鶴, 朝野春美, 黒田光恵, 幼稚園・保育所における子どもたちの健康問題と障害を持つ子どもの受け入れの現状: ある地域における幼稚園教諭・保育士に対するアンケート調査の結果から, *自治医科大学看護学部紀要*, **2006**, 4巻, 55-62
- 4) 木村留美子, 保育所看護職者の役割に関する実態調査(第1報), *小児保健研究*, **2006**, 65(5), 643-649
- 5) 藤城富美子, 保育園看護職者の役割と実際, *小児保健研究*, **2008**, 67(2), 236-241
- 6) 佐藤親可, 保育所の保健活動における看護職者の専門性の追求, *神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録*, **2007**, 32, 231-238
- 7) 中野綾美, 小児の発達と看護, *メディカ出版*, **2008**, 5
- 8) 厚生労働省編, *保育所保育指針解説書*, **2008**,
- 9) 藤上真由美, 保育所における障害児保育の現状と課題, *みんなのねがい*, 2002, 423, 22-27
東京, 株式会社フレーバル館

Original Paper

Recognition and role that childcare person expects of a person of school nursing job

Asami KATAOKA^{1*}, Chie YANO² and Mieko YAMASAKI³

Abstract: This study is intended to clarify the recognition and role that childcare person expects of a person of school nursing job. Study method performed a study of the qualitative induction using a semiconstitutive interview for 12 people of six childcare people who worked in the nursery school where six childcare people who worked in the nursery school where a person of post of nursing was located, person of post of nursing were not located.

As a result, it were extracted 6 categories of [the daily health care of the child] [a judgment, correspondence to the issue of health] [the consultant who made use of specialty] [the educational relation that I made use of specialty in] [the relief of the child] and [the protector support that I made use of specialty in]

Regardless of the placement of the person of nursing job, a judgment of the early detection, abnormality of illness, expertise including the correspondence to a sudden change, specialized correspondence based on grounds, existence itself of the person of post of nursing were connected in the relief to a childcare person, a family.

The healthy support of the further child, protector support are pursued in the present, the nursery school which the decline of the nurture power of the family has pointed out.

It was suggested that it led to improvement of the quality of the childcare the existence of the person of nursing job played an educational role to a childcare person in the childcare health, and to show each other's specialty.

Key Words: childcare person , nursery school nurse , role expectation

^{1*} Kochi Gakuen College, Advanced Course in Community Health Nursing, Email: akataoka@kochi-gc.ac.jp

² Kochi Gakuen College, Department of Nursing, Email: cyano@kochi-gc.ac.jp

³ Kochi Gakuen College, Advanced Course in Community Health Nursing, Email: myamasaki@kochi-gc.ac.jp